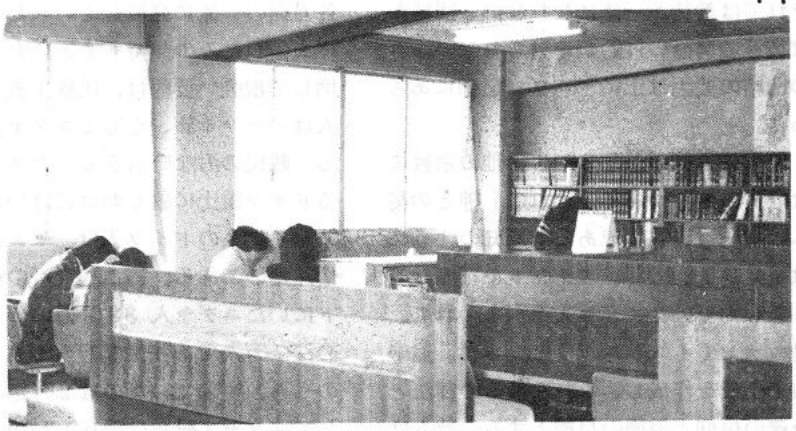
上田女子短期大学

No. 4

図書館だより

'77.12



館内近影

ユダヤ人

長井　保

ユダヤ人というと、私には1つの憶い出がある。小学生のころ父と青山の通りを歩いていたが、向うから背の高い黒づくめの外人の男の人が大きなカバンを下げてくるのに出逢った。父はその男とすれちがいざま「あれはユダヤ人だよ、ジューだよ」と吐き出すように云ったが、その侮蔑的な口調から、ユダヤ人とは何か汚らわしいものの様に、私は感じた。第1次大戦終結から何年も経っていないころであった。父のユダヤに対する偏見は、当時のヨーロッパの反ユダヤの思想が、この遙かに遠い東洋の街にも侵入していたという事実を思わせるのである。

ところで私はユダヤ人に関しては、若い頃からかなりの関心を持っていた。学生のころ旧約聖書をいささか読んでいたからである。だから戦後十千のユダヤ人の大虐殺の話をきいた時は、私の憤りははげしかった。アウシュヴイッツの何万人というガス毒殺、死体の脂から作った石鹸の話など信じられない惨酷さであった。人間が人間を、まるで木の根に群がる蟻の群を踏みつぶすように、万の単位で、むざむざと殺す事がどうして出来るのか、何か理由があるにちがいないと、憤りの中にも疑問に思うのであった。

四方海に囲まれて安穏に暮してきた日本民族とちがって、国境が地続きの西欧諸国にあっては、戦争による虐殺は、歴史上さしてめずらしい事ではない。併し今世紀のナチのユダヤ人の虐殺ほど、その規模の大きさ、その手段の残虐さに於てひどいものは他に類がない。ユダヤ人が今から4,000年の昔、メソポタミアのウルから出て、幾多の苦難と戦いながら、エルサレムに首都を持ったのは、約2,000年前のことであったが、その首都も西暦 132 年にはローマ帝国に奪われ、ユダヤ人には、国家のない離散と彷徨の生活が始った。彼らは地球上殆んどあらゆる所に住みついていたが、国を持たない賤民

よと罵られながら、一歩一歩自分の道を切りひらいて、離散しながら団結していった。彼らを固く結んだものに、第一に彼らの信仰の形式がある。彼らはヤハヴェと称する1つの神を信仰したが、この神は偶像を作ることを厳禁した。偶像がない、礼拝すべき姿形がないということは、信仰の一致を図る功妙な手段であった。偶像を礼拝すれば自然に礼拝の形式が規定される。ひいては信仰の条理、つまり教義に多様性が生ずる。それでは教徒が一体になれない。団結がなければ彼等の窮極の目的が達せられない。ユダヤ人の団結の要因は正にヤハヴェ信仰にあったのである。

次に、彼らの信仰の条理の中に、他の宗教に類を見ないものが1つある。それは「神との契約、神への契約」の思想である。周知のようにモーゼは紀元前1,230年、エヂプトで苛酷な奴隷生活に苦しんでいたユダヤ人を引きつれて、契約の地カナン(イスラエル)に向った。途中シナイ山で十戒を作成し、これを彼らの律法とし、自分達の信仰と道徳の目標とする。彼らはこの契約を収めた箱を、その後の苦難の生活の中で持ちあるき、1つの道徳律のもとに一層結束するのである。団結を強める第3のものに迸民意識がある。他民族がどんなに彼らを卑しめても、彼らは神に迸ばれた。特別の民族であるという優越意識である。この意識があってこそ彼らは種々の迫害をのりこえてきたのである。

さて、迫害の中で一ばん苛酷なものは虐殺であるが、ユダヤ人は歴史上2回の大虐殺を経験している。1回は中世期の十字軍と他の1回は大戦中の大虐殺である。十字軍はエルサレムが回教徒に占領されたのを憤って遠征してきたのであるが、ユダヤ人にキリスト教への転向をすすめ、それを拒否したものは、女・子供を問わず全部殺してしまった。十二世紀推定 150 万人のユダヤ人は、十六世紀には、 30 万に激減してしまったのである。又、ユダヤ人は不信仰のしるしに「ダビデの星」という黄色いしるしをつけさせられた。この故事をヒットラーが喜んで採用した事は云うまでもない。

さてこのユダヤ人の虐殺は、文明の進んだ今世紀になると一層その惨虐性を増す。その模様を述べる紙数は無いが、何故ナチが第二次大戦中にこの迫害を行ったか、ヨーロッパは紀元四世紀にキリスト教が認められて以来のキリスト教の諸国である。キリストを売ったユダヤ人との同居はがまんがならないというのも1つ原因であるけれど、又一方には、ユダヤ人は前から職業としては、商業と金融業しか許されていなかったが、性優秀な彼らは経済上にはもちろん各方面の一流に発展していったので、ヨーロッパ人のねたみの気持ちもあった。併しそれにも増して根強い要因は、民族主義である。ドイツ人はアーリヤ族、そしてユダヤ人はセム族である。賤民の汚ない血をもったユダヤ人を神聖なるドイツ領土に置くわけにはいかないのである。アーリア系のドイツ人は、セム系の血をきらい憎んだのである。第二次大戦の前夜、ポーランドにいたユダヤ人 330 万のうち、生き残ったのは7万人であり、16万人のドイツ系ユダヤ人のうち、生きていたのは2万足らずだった。そしてユダヤ人総数は現在1,200万人にしかならない。併し迫害がはげしくなればなる程、ユダヤ人の団結は強くなった。彼らは世界のあらゆる所に居ながら、契約の地カナンを、エルサレム(シオン)を恋うた。シオンに帰ろう、遂に1949年、彼らの夢はかなえられて、イスラエルは建国したのである。世界に飛躍した彼らの商魂は、今たくましく国造りに、貧婪なまでに専念している。折しもアラブのサダト大統領が戦後はじめて、一国の元首として、以前の仇敵イスラエルを訪れている最中である。

さて私はこの拙文を終るにあたって、一つの事を記して、ーそしてそれは私が一ばん云いたいことの一つであるがーおこうと思う。即ち、このキリスト教徒の反ユダヤ精神は、キリスト教の創始者キリストの口から、吐かれていたのである。

イエス云いたまう。「もし汝ら、アブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。しかるに汝らはいま、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なるわれを殺さんとはかる。……汝らはおのが父、悪魔より出で、おのが父の慾を行な

わんことを望む、彼ははじめより人殺しなり」「ヨハネ伝・八章」キリストのこののろいが、2,000年もつづいてユダヤ人が憂き目を見ようとは誰が想像したことだろうか。併し、人間は、主義主張のもとに何故たやすく人間を殺すのか？私の疑問は深まる許りである。

参考　村松　剛著　ユダヤ人（中公新書）
〃　　ナチズムとユダヤ人
（角川文庫）

（教　授）

女子学生と教養

松田幸子

現在の若者が大学へ進学するのは学問研究のためなどではなくて、市民的な義務や勤労の義務に拘束されないで、勝手気儘な生活を送ることができるからである。そのような大学生達の集団は与太者同然で、学生の集まる所では乱暴狼藉がひどく、今や大学は学問研究の場所ではなくなっていると嘆いたのは、実は十八世紀後半のドイツの大学の関係者達だった。これと似たようなことが日本の大学の現状にもみられはしないだろうか。ある大学が新しく学生寮を建てようとしたとき、予定地の周辺の住民から、与太者の集団を町に受け入れることはできないと猛反対を受けて立往生したと聞いているからである。それとは反対に、真面目に毎日講義に出席してはせっせとノートをとっている学生が大勢いることも事実であり、女子学生にはそのタイプに属する人が多い。そのような女子学生に、大学へ進学した目的を質問すると、「自分の可能性をみつけてやりがいのある仕事に就きたいから」とか「教養を身につけるために進学した」という答えがきまって返ってくる。その意味が漠然としているだけに、女子学生の甘さであると批判の対象にもなるが、その場合、「自分の可能性」とか「教養」という言葉を言葉の本来の意味で使っているとすれば、大学のあり方の本来の目的に合っていると私は考える。そのためには大学は大学らしい状態を保ち、学生は単に講義ノートをつくったり、卒業に必要な単位や何らかの資格をとるために勉強するだけではなくて学問研究の態度を身につける必要がある。

ところで、大学のあり方の本来の目的について論じようとすれば、ウィルヘルム・フォン・フンボルトの考えに触れることが適切であろう。彼は十八世紀後半のドイツの大学の状態を嘆いた一人であり、十九世紀に入って早々に新しい理想の大学としてベルリン大学を創立するために尽力した当時の文部大臣であった。学者でもあったフンボルトの考えた理想の大学とは学問的交際の場でなければならず、単なる職業訓練所であったり、講義を通してただ知識を授ける所であることは許されない。彼によれば、大学以前の学校は、研究が完了している事柄についての知識を伝達することを目的とするが、大学は、まだ研究が完了していない未知の問題について、教師と学生が同等の立場に立って共に苦労しながら研究をする所でなければならない。勿論大学における講義が無意味というわけではなく、学生生活が講義を受けるだけで終るとすれば、知識の量を増加させることだけが大学の目的となってしまう。ところが、教師にも学生にも未知なる問題について共に研究すれば、一つの問題をあらゆる角度から考える仕方を学生は学び、そのことで学生の心の中に内的変化が起こりうる。すなわちある一つの事柄を考えるとき、不偏不党の立場からあれこれと多面的に考える能力が育つ。そのような能力をフンボルトは教養と考えており、大学こそ、学問研究を通して教養を身につける場所であると主張したのである。この考えからすれば、一つの研究に熟達している結果、頭の働きが一面的になっている学者（学者馬鹿といわれる人）や博識だけを売りものにする人も教養ある人と呼ばれないことになる。又この考えは、「人間のたった一つの不幸なことはある観念が固定してしまうことである」とゲーテが語ったことと通じている。以上のような教養の意味を更に解釈すれば、教養とは多面的な思考力であり、物事の本質を見通す力であり、未知のものに立ち向かって、その答えを自分で創造する力ともいえる。この力は若者がこれからの人生を考えようとするとき、

一番必要なものではなかろうか。

青春時代には誰でも、私の本質はなにか、どのような人生を送るために生まれてきたのか、私には一体どのような未来があり、可能性があるかと悩むものである。特に女性の場合には、その悩みは複雑である。一方では従来のような良妻賢母型の生き方は旧いものとして退けて自分の可能性に応じて職業に徹して新しい生き方を貫きたいと思う風潮があるかと思えば、他方相変らず二十四才を結婚適令期と信じて、その年令が近くなると、大学院迄進学していようが、せっかく得た職場に馴れてきた時であろうが、お花や料理とかいわゆる「おけいこ事」と称するものを手広く習い良縁をそわそわと待つ女性もいる。そして又良妻賢母型が古いといってみたところで、それに代るどのようなものが新しくよりよい生き方かと問われてもはっきりした答えをいいきることは誰にも出来ないであろうし、他方結婚適令期に結婚して、従来の女性と同じように家庭におさまって二人・三人と子どもを育てた人でも、末の子どもが幼稚園に入る頃から何らかの形で社会活動をしたがる人もいる。ＰＴＡの役員をしたり、公民館の生涯教育事業に参加したり、講演会があると聞けば東に西にかけもちで出かける主婦がそのタイプであろう。このような現状を前に、私の人生はどのようなものにしたらよいかと悩む若い女性は多いことと思う。人間は他人の模倣をすることを天性としてもっているが、自分が模倣すべきものを知ることは難しいとゲーテは語っている。そのうえに、模倣しながらも更に自分なりの個性をみつけて生きることは、一層大変なことである。それでも私という人間はこの世にたった一人しかいないのであって、他の誰とも全く同一の本質を持っているわけではないから、〝私〟の生き方は結局、〝私〟が創造しなければならない。そのためには、固定観念にとらわれないで多面的に考える力、物事の本質を見通し、未知のものに立ち向ってその答えを創造する力とも呼ばれうる教養が必要である。女子学生が、このような教養を主体的な学問研究を通して身につけて大学を卒業するなら、女性であるという理由でたとえ割に合う職業に就くことができなくとも、大学本来の目的に合っているのではなかろうか。

（信州大学講師）

日本語のおもしろさ

北村恵子

日本語とは何とおもしろいものだと、この頃思う。１つ１つの字をとってみても、その字がどのように出来上ったかという深い歴史がある。日本には昔から短歌や排偕などというものがあり、ある一定の形式の中に五七五七七などの言いまわしの良い言葉を並べて１つの情景やら、自分の気持を表現してきた。

日本的と言われるものにお茶・お花・邦楽などがある。それらは家元制度という封建的なシステムの中で、許される範囲の自分をそこに表現するというものであり、家元が最高のものでそれ以上には決してなれなかった。もし自分の芸術を主張するようになれば、家元からは破門されて、別の流派をたてなければならなかった。多くの人々は、形式にしばられている事で、かえって自分というものをいかに密度を濃く表現するかということになり、形式を重じる事がさらに深い味わいを出していくことにもつながっていった。

こういう歴史的背景の中で、日常生活に直接的な言葉についても、人々が好んで楽しんだと思われるユーモラスな言いまわしについて現在も言われているものをあげてみることにしよう。「一富士二鷹三茄子」これは駿河地方の名産を言ったもの、という説もあるが、一般には初夢を見る時のめでたい順序とされている。これと同じようなものに「一姫二太郎」というのがあり、女、男、男の兄弟構成が理想的とされている。「一にほめられ、二憎まれ、三に惚れられ四風邪ひく」これは、くしゃみをすると誰かが噂をしているという言い伝えで、１つならばほめられ、２つならば憎まれ、３つならば惚れられ、４つならば本当に風邪をひいてしまうと言うものである。くしゃみは、自分の意志でする

ものではなく、偶然性のものであるからこんな事を言ったのではないだろうか。「バカの大足のろまの小足・ちょうど良いのが俺の足」バカの大足・のろまの小足、ここまでは、次に何が来るかと期待していると、ちょうど良いのが俺の足、などと、ちょっと自慢してみせるのがおかしい。「瓜売りが瓜売りに来て売り残し、売り売り帰る瓜売りの声」〝うり〟という発音が瓜と売りという二つの言葉の内容を示している。五七五七七の中に全部で〝うり〟が9回も入っており、早く言ったりすると回数をまちがえそうで、そのちょっとした緊張感が楽しい。この種の歌はまだ他にも沢山ある。これは畳語歌というのだそうである。「す桃も桃も桃のうち」「裏庭には二羽、庭には二羽にわとりがいる」「月月に月見る月は多けれど、月見る月はこの月の月」「今今と今という間に今ぞなく、今という間に今ぞ過ぎゆく」「南無釈迦じゃ、娑婆じゃ地獄じゃ苦じゃ楽じゃ、どうじゃこうじゃというが愚かじゃ」最後の歌は一休の作と伝えられるそうである。早口ことばとして「歌うたい　歌うたえというが　歌うたいのように歌うたわれたら　歌うたいのように歌うたうけれども、歌うたいのように歌うたわれないから、歌うたいのように歌うたわぬ」などがある。

又、漢字で、ちょっとした点や棒をつけることによって全く違う字になるという歌もある。「片仮名の、トの字に棒の引きようで、上になったり下になったり」とか、「瓜に爪あり、爪に爪なし」など。

又、文章の句読点をどこに入れるかで、全く違った意味の文になってしまうものがある。「カネオクレタイム」下宿生活の学生であろうか。電報で「金送れ頼む」と打った所、親は、「金遅れた飲む」と受けとり、うちの子は送金が遅れたのでやけ酒を飲んでいるのだろうと早トチリする。「弁慶がな、ぎなたを持ってや、蔵の上に立つ」変な所に句読点を入れて意味が通じなくなった時、「弁慶がな、ぎなたを持ってや」のくちだ、と笑われたりする。正しくは「弁慶が、なぎなたを持って、やぐらの上に立つ」である。「ここではきものをぬげ」ここで履き物をぬげ、と言っているのに、ここでは着物をぬげ、と読んだり、「シンダイシャテハイタイム」寝台車手配頼む、と言ったのに、死んだ、医者頼む、などと、愉快なまちがいが起る。又、次のような歌もある。「世の中は、すむとにごるで大違い、はけに毛があり、はげに毛がなし」「世の中は、すむとにごるで大違い、福にとくあり、ふぐに毒あり」だれが考えたものか、頭の良い人はいたものである。日本語というものは、このように難かしいものであり、おもしろいものでもある。言いまわしやちょっとした酒落言葉によってその場がなごやかになったりする。

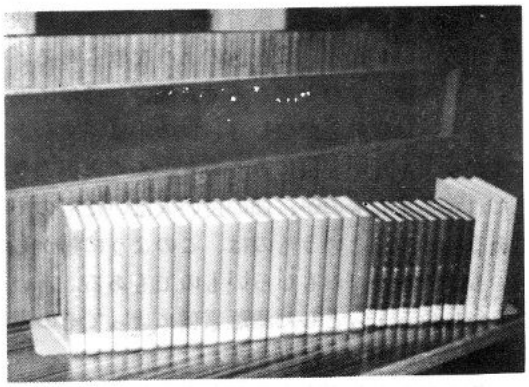
色々なことわざもあるが、どうしてそれが生まれてきたのか調べてみると、ことわざには、武器としての一面があり、昔の村々では、村どうしの言い争いが多く、そのために常々から言語技術を磨いておくことが必要であったらしい。柳田国男著「なぞとことわざ」には次のように書かれている。「相手が閉口といって、何も言えなくなれば勝ちであります。たとえば、敵がごく弱いと見ると、「鹿の角を蜂がさす」だの「釣鐘に蜂」だのといって笑い、むこうがそれを聞いておこってくると、「ごまめの歯ぎしり」だの「なめくじにも角がある」だの、「なぶればうさぎも食いつく」だのといいました。反対に、これは負げそうだと思う時は、「一寸の虫にも五分のたましい」だの「さんしょうは小粒でもぴりりとからいぞ」などと言ってみたり、相手があまり大勢の時は「門前のやせ犬」とか、「そこらでは犬もほえる」とかいって逃げ帰りました。そうすると相手のほうでも、「犬の逃げぼえ」などといって笑ったものでありました。」「蛙の子は蛙」などというごく当り前のことばでも、使い方によっては生きてくる。

ユーモアの解かる人間は、それだけ人生を朗らかに過せるものであろう。私はいつも、そうありたいと願っている。

（講師）

原田もと美さんの思い出

天田邦子



原田もと美さんは、6月の下旬、御自宅に近い長野市浅川の光幼稚園で教育実習をしている最中、突然の心臓発作で倒れられ、急逝されました。悲しいできごとからすでに半年が経とうとしています。学友たちは、いま来春の卒業をめざして、卒業研究のまとめや就職探しで忙しい日々を送っていますが、その日常生活のなかで、もと美さんを思い出すたびに新たな、静かな悲しみをかみしめています。

もと美さんは、昭和51年の4月に本学に入学してきました。わたくしが、もと美さんと個人的に話を交わしたのは、入学後まもない面接の折りでしたが、素直で、おだやかな物腰が印象に残りました。高校時代から暖めてきた、幼児教育者となる抱負や、そのためにこの保育コースで勉学するんだという、はつらつとした意欲を語られました。地味で、気負うことのない静かな闘志、温和で暖かい心をみたように思います。その後、ある梅雨の夕方、もと美さんが2、3人の友人といっしょに、わたくしの車に乗りこみ、上田駅まで雑談する機会がありました。短大生活に慣れたかとの問いかけに対し、通学に時間がかかるので早朝家を出て、暗くなる頃帰宅するようす、自宅でのピアノの練習時間の工夫を楽しげに話してくれました。志望にむかって歯車が回転し、努力を重ねているようでした。

もと美さんが、ユーモアや、意外な機敏性を持ちあわせていることは、夏休みの菅平ゼミで発見しました。キャンプファイヤーが盛り上がった頃、各クラス対抗の出し物がありましたが、本格的に衣装も用意してきて演じた寸劇は、喜劇として大成功で、ファイヤーを囲むわたくしたちは笑いこけて興じたものです。

あっさりと人間のおかしさを演技してのける才は、また、もと美さんが活躍していた体を十分に使いきって表現する創作舞踊部のクラブ活動の素地があったからかもしれません。

2年生の卒業研究では、「精神薄弱児の学習」というテーマを自ら決め、もう1人の学友とともに研究をはじめました。手元のノートにはもと美さんの発言メモが記されています。実質的に精薄児のためになる教育は、どのようであるべきかを考えたいといっていました。多種の文献研究を分担し、関係の教育機関、施設訪問の計画を立て、川崎市内のある養護学級から文集が届いた時点で、もと美さんは幼稚園実習に出不帰の人となってしまいました。このテーマの卒研そのものは、完成できませんでしたが、提起された問題は今後、ますます重要な課題として、わたくしたちに残されているように思います。後日、ご家族からうかがえば、もと美さんは学齢期の一時期に、療養生活を体験されたそうです。弱い人への暖かい思いやりや、卒研の時間にみせた凛とした態度が思い出されてなりません。

もと美さんの在りし頃、近隣の幼ない子どもたちが、なれ親しんで公園でいっしょに遊ぶことも多かったと、ご家族がいわれました。子どもをまわりに寄せてくるパーソナリティを備えたもと美さんは、実習先の保育所や幼稚園の諸先生方からも、将来を属望され、おほめと励ましのことばをいただいていました。

2年生の面接においては、すでに卒業後の就職に見通しが立ちはじめていましたので、急に、若くして亡くなられたことは、さまざまな場面を思い出すにつけ、悲しさと、残念さを感じさせます。

このたび、もと美さんのご家族のご意向によ

り、わたくしたちの図書館に「シュヴァイツァー著作集」全20巻、「ニィル著作集」全9巻「シェイクスピア全集」全7巻、を入れていただくことになりました。図書を媒介にすることで、思いを新たにし、もと美さんが、残されていった課題を広く、深く追求したいと思います。ご家族に対して感謝を申し上げ、もと美さんのご冥福をお祈りします。

（講師）

生きがいについて思うこと

1年　青木洋子

私が、生きがいについて、自分を見つめ考え始めたのは、ここ2～3年である。

精神医学者、神谷美恵子は、その著書『生きがいについて』の中で、「生きがいという言葉が、日本語にあることは、日本人の心の生活の中で、生きる目的や意味や価値が問題にされて来たことを示すものであろう」と言っているが、人間性疎外、生きがい感喪失が叫ばれている現在、私たちは、果たして生きがいを持ちうるだろうか。

生きがいを感じる心や、生きがいとなるものは、個人によって様々である。自分の一生を賭けるような強い使命感から生まれる生きがいもあれば、日常生活の中に見い出す、比較的穏やかな生きがいもあるだろう。しかし、生きがいを持つことにより、いきいきとした意欲的な生活態度が生まれると言われる。生きがいとまで言わなくても、めざす目標や何か自分に賭けるものがあれば、自ら、毎日の生活、ひいては、生きる姿勢そのものが、今までと変わってくるように思う。何事に対しても、全力でぶつかることができるし、他人に左右されることも少なくなる（もちろん協調性は必要であるが）

そして、何にも増して自分自身に強くなることができるだろう。

そう考えれば、現在の私たちの生活をもう一度考える必要があるだろう。私たちの殆んどが幼児教育者や、施設保母を目ざしているわけであるが、その役割の重要性を深く認識しているだろうか。その問題を考える時、いつも思い出すのが、須永先生が、保育原理の講義で「あなたたちは、日本の将来を背負って立つ人を教育するのだから、あなたたちいかんで日本が良くもなれば、悪くもなる」と言われたことである。私は、心の中で、「このままではいけないんだこのままではいけないんだ」と叫びながら、自分の無知と保育者の役割の大きさに対する恐怖（戦慄を覚えるとはこのことです）に支配され途中で妥協してしまうような勉強のしかたや目先のことしか考えない生活態度を、改めて思い知らされたような気がした。人格形成期である幼児期の重要性を誰もが認めながら、それを膚で感じないのが現状であろう。しかしながら、日々成長していく子どもに対応していく為には、私たち自身が成長し、巾広い知識と豊かな人間性をもった人間にならなくてはいけないのだ。少なくとも、その方向へむかうよう努力しなくては……

具体的には、自分の目ざす専門の知識、原理をしっかり押える勉強の他に、自分を高めるための、又趣味としての本を読むことも一つの方法だろう。いずれにしろ、何事に対しても敏感に反応する心、感動する心を忘れてはならないと思う。

私たちは今、健康な体と勉強をする自由が与えられていることに感謝し、この学生生活の中で、自分の求めるものを見い出す時期に来ている。やがては、この世の中での自分なりの役割性を見つける為に、今この時、この瞬間を大切に生きよう。

（注）神谷美恵子の「生きがいについて」（みすず書房）は読んでみる価値があると思います。[ト]にあり、他に「こころの旅」（日本評論社）「人間をみつめて」（朝日新聞社）「極限のひと」（ルガール社）等があります。

―― 何　か ――

2年　小 林 美恵子

合唱練習を終え、鼻うた混じりに防寒の身仕度をし、夜をバイクで 15分、9時 20分頃家に着く。〝お一寒かった〟鼻うたは続く。夕食を作り始める。人参とグリンピースと、コーンの冷凍食品とご飯を炊めながら、鼻うたに乗って、♪パパの好きなグリンピースさんとママの好きなコーンさんと、おばあちゃんの好きな人参さんと白いご飯を炊めて、味塩少々、コショウを少々、粉チーズとパセリをかけて、は〜いおいしい炊めご飯のでき上がり、さあ食べましょ・・食べましょ・・冷めないうちに食べましょう・・・♪と次から次へとよくまあとあきれるくらい出てくるうた。

食べながら、今は幸せなんだなあーとしみじみと感じてた。けれど蒲団に入ると心地好い温りとは裏腹に、「あしたはこうはいかないだろうな」と不安になってしまう。どうして明日も頑張って、この幸せを、充実した時間を持とうと、作り出そうとは思わないのだろう。そんな気持を起こそうにも、キューンと沈んだ心を引き上げられない心。そんな心にまた心が沈み込む。考えれば考えるほど沈み込む。「はー。」大きなため息を1つ。〝やすらかに眠むろう!〟と思って目を閉じる。

幸せを感じた1日が持てたのも、今日までの迷える日々があったからだと思う。この短大を受験するかで迷い、入学するかで迷い、結局、両方とも、自らの積極的意志は弱く、その中にいた。そして過ぎてしまった。

入学し、何か、何か思いきりしたくて、少しでも興味のあるクラブは手あたり次第のぞいてみた。何か、何か、私の中の何かが、微かな熱だが持っている。冷めてしまった私の中の貴重な一点の熱、冷めないうちに、冷めないうちに。何かないかな。いろんな人に声をかける。でも、満たされない何か。私は何をすべきなのか。何をしたいの？わからない。動けない!。生み出せない!!。

生み出そうとしなかった。生みだすすべを知らなかった。それすら気づかなかった。気づこうとしなかった。限りがない。ばかげてくる気もする。どこか違っていた。何かが足りなかった。

もの足りなくて、学園の外へ向う。学園のサークル活動で知り合った、他の大学の学生たち、サークルの話、人生観、とりとめもない話、聞いていると落ち着いた。何かある。が、、焼え上らない。ピーンとこないのだ。

1年生の2月、初めての実習、重度心身障害者の施設での8日間、短かいようで長く、長いようで短かく。障害といわれるものを背負わされてしまった友。一緒に居るとせつなくて、涙があふれる。苦しい、早くここから出たい。家に帰りたい。実習はやく終って欲しい。そんな気持ちも起った。保母、私が保母、なぜ……。

3月、名古屋で行なわれた、日本のうたごえ祭典に1人ででかける。夜行の中で、他の大学の学生から、東京芸大で行なわれる、全国教育ゼミナールを知る。行くよう勧められる。

祭典は大規模、何千人という全国の仲間が集まった。宿泊のお寺では、いろいろな人の話を聞くことができた。

あっという間に4日間がすぎてしまった。5日目、迷い続けていたが、東京行きを決定、友だちの寮に泊めてもらい、芸大に3日間通う。いくつかの分科会があった。いくつかのぞいてから、一番大きかった障害児問題の分科会に顔を出す。卒論の発表なども行なわれていた。そこで知り合った彼女、障害児から障害者のこと女性についてなど、いろんなことを話たっけ。歴史の浅い音楽教育分科会では、卒論が通らず1年留年の質素な彼、卒論の苦労話しを聞いたっけ。幼児の音楽教育に焼えていた彼女、フルートに焼えていた彼女。

あれから8ケ月、短大の先生を訪ねたり、長大のゼミに顔を出したり。

私は今、高校のＯＢの集る合唱練習の中に〝何か〟を見い出しはじめている。

創作児童文学、及創作絵本について

― にっぽん児童文化夏季大学から ―

長張和子

およそ、児童文学、絵本等に素人で門外漢の私が、幼児教育科の[ト]の仕事をしていく上で頭の重いことは絵本、童話類（総称して[ト]では「児童書」としている）の選定、収集である。昔と違い、現在は年に約2,000点近くに及ぶ子どもの本の出版事情の中で、何をどう選ぶかは大きな責任があると考えられる。

今夏、上田市別所での「にっぽん児童文化夏季大学」の開催を聞き、日頃の悩みを少しでも解消出来たらと、基礎知識を吸収する目的で参加した。これをもとに、創作児童文学の流れについて書いてみたい。

かつて、アンデルセン、グリム、鈴木三重吉、浜田広介に代表された児童文学の世界は今や、創作児童文学がとって替るようになった。特に、戦後昭和28年頃から岩波書店が、＜岩波子どもの本＞のシリーズを刊行して新旧の外国創作絵本を日本に持込み、児童文学の世界に殴り込みをかけた。そして、このことは日本の作家達に新しい創作絵本の世界を切り開かせる引きがねになり、理想的な絵本はいかにあるかと問題を投げかけた。＜ちびくろさんぼ＞＜ちいさいおうち＞＜ひとまねこざる＞は今もって読み継がれている代表作である。しかし、このシリーズには多少の欠点もあり、外国作品がほとんどであったことなどからして、この点をふまえて新たに福音館が＜こどものとも＞という月刊絵雑誌を発刊した。これは従来の絵雑誌の世界を根底からくつがえし、1作1冊主義の物語絵雑誌、つまり、月刊形式の絵本としたのである。これにより、日本の童話、絵作家がどんどん児童文学の世界に誕生してきた。子ども達に変らぬ人気を保つ＜ぐりとぐら、中川李枝子＞＜おおきなかぶ、内田莉莎子訳＞＜三びきのこぶた、瀬田貞二訳＞＜だるまちゃんとてんぐちゃん、加古里子＞等がある。

この＜こどものとも＞を背景に＜世界傑作絵本シリーズ＞が前述の＜岩波のこどもの本＞を下地にして生れ、＜いたずらきかんしゃちゅうちゅう＞＜かもさんおとおり＞＜ブレーメンのおんがくたい＞等々の絵本が出た。こうした創作絵本とともに古典童話や、グリムが絵作家の手により、新しい感覚の絵本としてよみがえり、再話者や訳者の手により、新しい創作絵本として現在の子ども達の感覚にそったものとして生れ変っている。＜ももたろう、赤羽末吉画＞は昔のももたろうと違い、どこにもいるわんぱく坊主のももたろうが描かれているし、先の＜ブレーメンのおんがくたい、グリム＞も線書きのさしえによって生れ変っている。絵作家としては「いわさきちひろ」が近年独特の世界を描き、創作絵本に大きな力をかしている。

このようにして、児童文学専門の出版社も増え、新しい創作絵本の世界が大きく広がり、より質の高い児童文学の世界にと努力がなされている。又、子ども達の世界を描いたり、動物や乗物の空想的な絵本、知識や概念を教えるノンフィクション絵本等、以前にはなかった絵本も創作絵本の中に入ってきている。

今回、特に創作児童文学をとり上げたのは、古典文学も大切だが、今や、この創作児童文学が、児童文学の中に大きく重要なジャンルとして確立されてきているからである。皆さんは、現在子ども達に一番人気で読まれる絵本は何か、又、代表的な絵本作家や作品を何点位知っているだろうか。幼児教育を学び、保育者として実践の場に出る人に、本当によい絵本をわかってほしいと願う。児童文学の講義以外でも大いに研究してほしい。

2,000点にも及ぶ児童図書の中には、当然良い絵本、悪い絵本がある。この中で、永続的に価値あるものを選び出して決定づけるのは子供たちです。子供の心に直にアピールするもの、これを研究することが大切です。良悪の区別や、児童文学解説は専門家によるものとして、最後に、本学の図書の中から絵本を研究するための参考資料と、本年度新着児童書の中から話題の絵本を3点上げてみたい。

〔参考資料〕

o 3才から6才までの絵本と童話（鳥越信他）誠文堂新光社

o幼児のための絵本と文学（渋谷清視）　金の星社

oわたしのなかの子どもの本（　〃　）鳩の森書房

o児童[ト]員と文庫のおかあさんがえらんだえほんのもくろく（児童[ト]研究会）日本[ト]協会

oどの本よもうかな（日本子どもの本研究会）風濤社

o児童文学論　（L. H. スミス他）　岩波書店

〔絵本〕

o雷の落ちない村（三橋せつ子）　小学館

ガンに冒され、35才でこの世を去った女流画家三橋せつ子がわが子に永遠の別れを、残された少い時間の中で描きつづけた、琵琶湖地方の民話をもとに綴った絵本。「湖の伝説」ー梅原猛」も参照。

oはせがわくんきらいや
（長谷川集平）　すばる書房

森永ヒソミルクの被害者の著者が身近にいた友達を題材に書いた自己形成の問題作で、第3回創作絵本新人賞受賞作、大人も必読すべき絵本。

oやまぐにほいくえん（征矢清）　福音館

長野県出身の著者が、上田市の保母として働く甲田宣子さんのノートやスケッチに記録された園での生活の折り折りを題材にして創作したもの。独鈷山が「のこぎり山」として描かれている。

以上、創作児童文学等について簡単だが素人の[ト]員の立場からのべてみた。

（図書館　司書）

図書館はだれのもの

図書館はあなた個人の占有物ではありません。次のことに注意して下さい。

o本や雑誌をていねいに扱って下さい。

o返却期日を守って下さい。

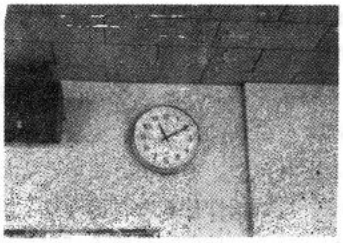
o書庫内にはカバン・コートを絶対持ち込まないで下さい。

o閲覧室では静粛にして下さい。

〔図書館の動き〕

本学図書館が本州女子短大に始って以来、始めて記録されるような動きとして、本年は図書館の拡張工事が行なわれた。7月末から8月一杯かかる改造工事のため、全蔵書をそっくり大移動するという大変なものであった。旧閲覧室は閲覧のみの形態をとり、旧書庫を事務室と一部受付カウンター、旧ロッカー室には全蔵書を入れた書庫とし、書庫には一部窓側に落ち着いた雰囲気で利用出来るキャレルを配した。閲覧室には今までの倍の閲覧机が追加され、中央に衝立を付け、向いの人を気にしなくもよい体制をとった。改造後、しばらくは慣れない人も多かった様子だが、冬期は温風暖房も入るので、大学図書館らしい静粛な図書館として、利用規程を守ってお互いに気をつけて利用してほしい。

尚、この工事の完成を祝い、上田、西沢書店から柱時計一式と、英文堂書店から色紙額が贈られた。紙上にて披露させて頂くとともにお礼申し上げます。



〔図書館資料収集〕

昭和51年度の図書館の図書、資料購入結果は、131万余円となった。全国短大平均（私立）420万円からみると、まだまだ少い予算ではあるが、昭和52年3月現在、次のとおり、図書資料を収集した。

1. 図　書
   - (イ) 購　入　　635冊
   - (ロ) 寄　贈　　71冊
   - 計　　706冊
2. 資　料
   - (イ) 遂次刊行物　　26冊
   - (ロ) 雑　誌　　52種　494冊
   - (ハ) 紀要類（寄贈）　　156部
   - (ニ) その他視聴覚資料等　57部

寄贈図書　－52年度主な寄贈－

○ミシェル・フーコー（A・ゲデ）	朝日新聞社	浦沢和子先生　寄贈
○北　帰　行　（外岡秀俊）	河出書房	〃
○アインシュタインの世界（L・インフェルト） 他・自然科学関係図書10冊	講談社	〃
○青春の墓標　（奥　浩平）他7冊	文芸春秋	本学50年度生 成沢とよみさん　〃
○脳性マヒ児の家庭指導（小林堤樹 他）	三越厚生事業団	上田市教育長 滝沢　石氏　〃
○歌集　寒　庭　（塚田青紀）他3冊	白玉書房	本学前事務長 遠藤憲三氏　〃
○雑誌「信濃」バックナンバー	信濃史学会	〃
○宇宙と心の世界　（谷川徹三）他読売選書全40冊	読売新聞社	読売新聞社　〃
○ニイル著作集　全9巻（A・S・ニイル）	黎明書房	本学51年度生 故原田もとみさん父君
○シェイクスピア全集　全7巻（W・シェイクスピア）	白水社	原田　任氏　〃
○シュヴァイツアー著作集　全20巻（A・シュヴァイツアー）	〃	〃 〃
○人間革命全9巻（池田大作）他池田大作著作図書17冊	聖教新聞社	創価学会　〃
○激動とともに　（井川照子）	王子隣保館保育園	王子隣保館保育園〃
○お菓子読本	明治製菓K.K	明治製菓K.K　〃
○淑徳短大三十年の歩み	淑徳短期大学	淑徳短大　〃
○大正大学五十年略史	大正大学	大正大学　〃
○二松学舎百年史	二松学舎大学	二松学舎大学　〃
○音楽リズム　（小林美実他）	川島書店	北村恵子先生　〃

〔図書館利用〕

昭和51年度の本学図書館利用状況

（表Ⅰ）館外貸出冊数

分類	000 総記	100 哲学	200 歴史	300 社会科学	400 自然科学	500 工業工学	600 産業	700 芸術	800 語学	900 文学	児童書	計
冊	25	236	136	1552	288	159	0	380	25	1068	1971	5839
%	1	4	2	26	5	3		7	1	18	33	100

（表Ⅱ）館外貸出、利用状況の推移

年度	延べ入館者	総貸出冊数	学生数	1人あたり入館回数／年	1人あたり貸出冊数／年
48	6235人	2405冊	210	29回	11冊
49	9931人	2580冊	258	34回	10冊
50	16259人	4989冊	324	40回	15冊
51	22951人	5839冊	373	61回	15冊

編集後記

本学開学以来10周年を経た。

それに当り、「図書館だより」も内容充実をはかり、ページ数を増して今回のような様式に模様替した。

本学先生方からは多数の原稿が寄せられ、又外部からも、信州大学の松田幸子氏の寄稿も加った。この機関誌が学生諸姉の考える機になれば幸いである。

本年は図書館も改造され内部も拡張された。〃宝の持ち腐れ〃とならぬよう学習に又、自己形成の場として大いに利用してほしい。　（窪田）

新着図書 －52年度の主な資料－

○明治保育文献集1～10		日本らいぶらり－
○子育てごっこ	（三好　京三）	春　秋　社
○知的生活の方法	（渡辺　昇一）	講　談　社
○児童福祉	（柴田　善守）	家政教育社
○教育実践記録選集1～5		新評論社
○あすを拡く子らーさくら、さくらんぼ保育園の実践	（斉藤　公子）	あゆみ出版
○ピアノ音楽史	（W・アベール）	音楽の友社
○女教師のための講座1～3	（一番ヶ瀬康子 他）	第一法規
○現代婦人運動史年表	（三井　礼子）	三一書房
○愛はすべてではない	（B・ブルーノ）	誠信書房
○スポック博士の家庭教育	（B・スポック）	紀伊国屋
○思春期内科	（森　　崇）	日本放送出版協会
○小児自閉症	（平井　信義）	日本小児医事出版
○自　閉　児	（全国情緒障害教育研究会）	日本文化科学社
○現代女教師論	（帯刀　貞代 他）	明治図書
○図説日本民俗学全集	（藤沢　衛彦）	高橋書店
○婦人教師の百年	（木戸　若雄）	〃
○学　習　塾	（遠藤　豊吉）	風　濤　社
○乱塾時代	（毎日新聞社会部）	サイマル出版
○キブツの保育	（石垣恵美子）	誠信書房
○講座、現代社会教育Ⅰ・Ⅴ		亜紀書房
○細川嘉六著作集1～3	（細川　嘉六）	理　論　社
○信濃教育会九十年史上・下	（信濃教育会）	信濃教育会
○日本子どもの歴史1～7		第一法規
○国家思想史　上・下	（田中富久治 他）	青木書店
○母子栄養ハンドバック	（武藤　静子 他）	医歯薬出版
○ギター黄金時代の巨匠たち	（高橋　　功）	全音楽譜
○日本のわらべうた	（尾原　昭夫）	社会思想社
○湖の伝説	（梅原　　猛）	新　潮　社
○鈴木三重吉童話全集1～10	（鈴木三重吉）	文　泉　堂
○紙芝居　ー創造と教育性ー	（子どもの文化研究所）	童　心　社
○いわさきちひろ作品集1～7	（中谷　　泰 他）	岩崎書店
○A History of American education	（H.G. Good）	Macmillan CO.
○Encyclopedia of education	（E. Blishen）	Philosophical library
○The Educator's encyclopedia	（E.W.Smith and others）	Prentice-Hall
○John Dewey: his contribution to the American tradition	（I. Edman）	The Bobbs-Merrill CO.

他 洋書36冊

上田女子短期大学　図書館だより　第4号　1977－12－22 発行
編　集　上田女子短期大学図書委員会
発　行　上田女子短期大学図書館